

# 入中1年人権だより

徳島市 八万中学校  
1年生 第18号  
2020年11月24日  
編集・文責 吉成正士

## 第2回学年全体人権学習から:11月12日第2弾

前号の続きです。みなさんの発言や感想から、学びを膨らませ、確かなものにしてみてください。

橋本さんの話を聞いて、「自転車に乗っているときに目の見えない人の後ろを何も言わずに通り過ぎないでください」みたいなことを言われて、そういうことをしたことが小学校の時に何回かあったから、それをこれから気をつけようと思いました。(6組KH)

この発言に共感した人が他にもいたということが、感想から分かってきました。

■私は障がい者問題を通して、自分は本当に知らないことが多いんだなと思いました。私が、この橋本さんや平田さんの話を聞いて障がい者のことを知ることとがなければ、私も目が見えない人たちに困らせたり、不安にさせていたと思います。実際に自転車で目の見えない人を抜いたことがあるので、勇気を出して、そういう人たちに寄り添いたいと思いました。

そして今日、いざとなったときに声を出す勇気をつけたり、すぐに助けたいと思ったときに行動するにはどうしたらいいかということも考えながら意見を聞いているときに、普段から障害者だけじゃなく、困っている人を助けるというのを言ってる人がいて、それなら私も普段の生活の中でできるので、やってみたいと思いました。障害者の学習をすることでも、人と人との関係の距離が縮まるんだなと思いました。

最後に、目の見えない人たちに障害者と呼ぶことについて、私もあまり言いたくないと思います。だから、これからどうしたらこの問題を少しでもよくできるのか考えてみたいと思います。OZ

「無知が差別を生む」は、以前にも紹介しましたが、やはり知ること、学ぶことの意味、大切さを痛感します。知ること、学ぶことで、「知らないことで誰かを困らせたり不安にさせたりしていた」ということを、知ります。「知らない」ということは、「罪なこと」と言えるかもしれませんが。かといって、人は一生かかっても、世の中のすべてを知ることにはできません。なら、あきらめるのか、それとも知ろうとするのか。それを決めるのは、あなた自身です。

それから、こうやって人と人が語り合って学ぶことは、教科書や本には載っていないことかもしれません。人の心の中は見えませんが、このようなことが、生きていくうえではすごく大切なことなのかもしれないわけです。それが、人と人の距離を縮めることになるわけですから。

また、「行動するにはどうしたらいいか」についても、多くの人が発言を重ねてくれましたね。

まず、私にできることは何かと考えました。私は困っている人に声をかけられるのか、それは私にとってはとても勇気を出さなくてははいけない。それに、パニックになってしまうかもしれないです。ではどうすればいいのか。たとえば、お店で困っているなら店員さんに。どうしても声をかけるのが怖かったら近くの大人や他の人に伝えるとか、とにかく手助けをしたらと思って行動したいです。他にも、いろいろなことを学習して、他の方法を知って行って、私が考える、私ができる最大のことをしていきたいです。(2組TT)

\*

私は、平田さんや橋本さんが、「もし町中で白杖を持っている人やドナーさんが困っていたら、声をかけてほしい」と言っていたけれど、それはとても勇気があることで、それが自分ができるかどうかは分からないけれど、もしそれができなくても、町中で点字ブロックの上にか邪魔になるような物があつたらそれをどけるとか、そういうのは自分たちでも、少しの時間でできると思うので、そういうことを私はやっていきたいなと思いました。(6組MU)

\*

友達とかが困っているときに、積極的に助けてあげたりすることができれば、いざとなったときに声をかけられやすくなるんじゃないかと僕は思います。(3組MY)

今、自分にできること。一つ思いつきました。「体を鍛える」こと。

「いざ」というときのなかには、「災害」も入りますよ。日常的に人の助けをすることも大切ですが、「いざ」というとき、自分の命が守れないようでは、人の命を助けることもできません。それは、毎年のように起こっている自然災害が証明しています。スポーツとして体を鍛えるのもいいでしょう。でもそのなかに、「実は、『いざ』というときのために鍛えている」というのもあっていいのではないのでしょうか。みんながみんな、健康に動けるわけではないのですから。障がい者だけでなく、高齢者や病気の人が、ケガをした人もそうです。となれば、健康な人が体を鍛えておくことは、他の人を助けることにつながるのだと思います。どうでしょうか。

■僕はたくさんの意見を聞いていて、発表ができませんでした。そのとき、「受け身ではなく自分から」という意見を聞いて、今の自分は受け身になっているなと思いました。このような場で手を挙げて発表できないのだから、町で目の見えない、見えにくい方を見かけても、手助けできないかとも思いました。日常的に友達を助けたり、進んでボランティアできているから安心とはいかず、いつどこでも同じ対応できなければいけません。確かに多人数の前で発表するのはとても勇気のいることです。しかし、町の中で知らない人に話しかけるのは、もっと勇気のいることだと思います。だから、今日

発表した人たちは、よく障害者問題について考え、意見を伝えていてとても尊敬します。今の僕は、もし目の見えない、見えにくい方を見かけても、恐くなって話しかけることもしないと思います。しかし、点字ブロックの上に自転車があると通れず、困ってしまいます。そこまでしっかり考えても行動できないのは自分でも許せないので、自分の最大限の行動をとって命だけは守ってあげたいです。目の見えない、見えにくい方がいなくても、身近にいると考える行動したいです。5組HD

最後の「身近にいると考える」というのは大事ですね。学習が、学習のときだけのものではもったいありません。学びは、生かしてこそ意味が出てきます。生きるように、常に想像をめぐらすことです。

それから、「障がい者」と呼ぶことについての疑問や違和感も話題となりましたね。

橋本さんたちの話を聞いて、目の見えない人や見えにくい人たちのことを障がい者と呼びたくなくなりました。(5組NG)

\*

先ほどの、目の見えない人を障がい者と呼びたくないという意見に、すごく感動しました。私も、害を持っている人ではなく、同じ人間として、分かち合って生きていきたいと思いました。(4組HS)

一方で、こんな考え方もあります。「障害の害は障がい者自身にあるのではなく、社会の側にある」というものです。私たちはもしかすると、障がい者自身に害があるという前提で考えていたのかもしれませんが、これは逆の発想です。世の中にはいろんな考え方がるものです。

■僕は今回の人権学習で心に残っていることは、目が見えなかったり足が不自由な人や耳が聞こえない人たちを障がい者と呼ぶのではなく、名前と呼ぶというのが、とてもいいと思いました。今まで僕たちは、障害者の人たちの話を聞いてなど、この話が出るまでは呼んでいたと思います。盲導犬ユーザーの平田さんなど、人には名前が必ずあるので、名前と呼んでいきたいと思います。そして、八万中学校で平田さんや橋本さんの話が聞けて、とてもいい学習ができて良かったです。これからは人権学習をたくさん学んでいきたいです。5組UN

「ちひろ」の「ひろ」が盗られて、「せん」になった物語の、映画「千と千尋の神隠し」。名を失うということは、その人が自分の存在そのものを見失ってしまうということ。だから、自分の名前は大切にしなければならない。これは、映画監督の宮崎駿さんが、自宅の近所にある東京の国立ハンセン病資料館によく出入りして知ったことから来ていると言われています。

その昔、ハンセン病にかかったことが分かると、専門の療養所に収容されていきました。差別の対象とみなされたため、療養所では自分とは分からないように、多くの患者が自分の名前を変え、偽名ですごしました。つまり、自分の本当の名を捨て、別の名前で生きたのです。それは、それまでの自分の人生を捨てることで

もありました。残してきた家族が差別を受けないように、自らの名前を捨て、変えたのです。そんな、名前を変えざるを得なかった事実は、ハンセン病の他にも、アイヌでも、在日コリアンでも、沖縄でもありました。そんな歴史が、日本にはありました。

よく、人をおおざっぱに、ひとくくりにして呼ぶことがあります。徳島の人、とか、八万中学校の人、とか、障がい者、とか。でも、例えそれが事実だとしても、個人として見たり判断することは、大切に持っておかなければと思います。でないと、本当に大切なことを見失ってしまうかもしれませんから。そのためにも、「名前と呼ぶ」ということは、大切なことなのだと思います。

■今日の人権学習で私は、最後の質問で言えていないことがあります。私は多分、自分で思っている以上に自分の立場にプレッシャーや後悔によるストレスを感じます。「このクラスがまとまってくれないのは自分のせいだ」とか、「あのときなんで声をかけてあげられなかったんだろう」とか、普通こんなことを毎日感じていたら頭がおかしくなってしまいます。けれど私は、毎日しているあることに救われています。それは部活です。部活自体に救われているのではなく、私は部の仲間に救われています。特に同学年の子では幼稚園からのつきあいの子もいるし、小学校の時、一緒に金賞めざして頑張った子もたくさんいます。私はそんな大好きな仲間とする練習・演奏・下らない話や下らないことをして笑う、そんないつもの普通の生活に救われ、とても幸せを感じています。だから、困っている人を見つけて助けてあげる。それもきっと、助けてもらった人にとってはとても嬉しいこと。そして私のように、いつものみんなと話すことで救われている人もきっといるから、いつもの自分で明るく接してくれることで救われている人もたくさんいるんじゃないかと思いました。6組MU

「特別な何か」ではなく、「日常の当たり前」が、どれだけ尊いか。そんな簡単なことを、人は時として忘れてしまうものです。本当に忘れてるわけではないのですが、どこか頭の隅の方に仕舞い込んでいるのでしょうか。そして、ケガや病気になったとき、物事が思い通りにいかなかったとき、当たり前が当たり前でなくなったとき、失った「日常の当たり前」の大きさに気づくのです。ぽっかり空いた穴に思いがけず落ちたとき、仕舞い込んでいた「日常の当たり前」が突然目の前に現れてくるのです。みなさんの小学校の卒業式のように。

みなさんのいるクラスは、あと4ヶ月もすれば場所をうつし、顔ぶれも変わります。いつか卒業もしていき、この町を離れる人もいるでしょう。新しい出会いはあるでしょうが、今身近にいる人は、いなくなります。なくなったときのことを思えば、今、当たり前にいることの大切さを想像できるかもしれません。

人は出会った瞬間から、別れへのカウントダウンが始まっているものです。そのときのために、いま、どうするのか。でも心配しないでください。別れても、失っても、それはなくなってしまいうけではありません。もし望むなら、あなたの心の中に、「思い出」という宝物として、永遠に残り続けていくのですから。